173

原因不明の溶血性副作用が疑われた1症例

◎澤田 彩香[1)]、吉村 公利[1)]、中村 愛望[1)]、家原 和章[1)]、森川 潤也[1)]
社会福祉法人恩賜財団済生会 大阪府済生会野江病院[1)]

【はじめに】溶血性輸血副作用（以下HTR）は、赤血球抗体による免疫性溶血と抗体が関与しない非免疫性溶血に分類される。今回、赤血球輸血翌日にHTRを認めたが、原因を特定できなかった症例を経験したので報告する。
【症例】70歳代女性、妊娠歴あり。血液型O型RhD陽性。他院にて照射赤血球液（以下RBC）6単位輸血。上部・下部内視鏡で出血源は認められず、貧血精査目的にて当院紹介入院となった。当院での上部内視鏡検査の結果、胃前庭部毛細血管拡張症（GAVE）が確認され治療開始。RBC輸血翌日よりAST・LDH・T-BILなど溶血項目の上昇、破砕赤血球の出現、血尿がみられた為、HTRを疑い精査を実施した。
【方法】血液型・不規則抗体スクリーニング・クロスマッチはゲルカラム凝集法（BIO-RAD社ID-System；ID-Gelstation）により実施し、直接抗グロブリン試験（以下DAT）及び抗体解離試験（BIO-RAD社DiaCidel使用）は試験管法で行った。
【結果】輸血前後の検体、RBCは全てO型RhD陽性。不規則抗体スクリーニングは輸血前後ともに陰性。クロスマッチ適合。輸血後のDAT・抗体解離試験も陰性となった為、日赤血液センターへ精査を依頼したが、当院と同様の結果であった。
【考察】赤血球抗体によるHTRの可能性を疑い、輸血前後の検体で精査を実施したが、異常は認めなかった。非免疫性溶血についても、病棟へ輸血針や加温器使用の有無等輸血実施状況を確認したが特に問題はなく、HTRの原因を明らかにすることは出来なかった。今回輸血されたRBCのバッグの回収が出来ていないが、原因究明に有用であった可能性がある。
【まとめ】RBC輸血翌日より溶血を示す所見を認めたものの、原因を特定できなかった。HTRが予想されるような所見を見逃さない為に輸血後のデータを確認できる体制が必要である。また、HTRに関わらず輸血副作用が疑われる場合には、感度の高い精査を実施し患者の副作用症状を確認する等臨床側との連携が重要であると考えられる。

大阪府済生会野江病院　TEL 06-6932-8600